論　説

学習者の探究心を喚起する防災教育プログラム
～地名をヒントに郷土の自然と歴史を理解し、次の災害に備える～

東北大学災害科学国際研究所 教授 佐藤 健

1．はじめに

私たちにとって最も身近な存在のひとつに地名があります。民俗学者の柳田國男は、「人と土地との交渉が即ち地名である」と述べているように、古い地名ほど、その土地が本来、持っている自然条件や歴史などの極めてローカルな固有情報を映し出した鏡と言っても過言ではないように思います。

そこで、地名の全てが災害と関係があるわけではありませんが、だからと言って、せっかく先人が与えてくれた防災に役立つヒントを軽視すべきではありません。具体的な例を取り上げて、地名のひみつを探る取組を防災に活かす実践のアイディアを紹介します。

例題として、仙台市内に実際にある地名で「熊ノ前」は、どんなことに由来した地名なのか考えてみることから始めてみることにします。昔から動物の熊がよく出没する場所だから、落語の登場人物である長屋の八っつぁん、熊さんでお馴染みの熊五郎さんが住んでいた場所だから、などと思いを巡らして自由に仮説を立てることができます。

2．地域調べを始める

ローカルな地域のことは、一般論として捉えてネット検索しても必ずしも有効な情報や妥当な結果が得られるとは限りません。古い年代の地図（旧版地形図）や郷土誌などの資料が有効な情報源になります。

いま着目している「熊ノ前」という地名は、仙台市太白区富沢字館の付近の地図の中に確認することができます（図１）。近くに熊野神社や熊野宮橋など、「熊」が用いられた名称も確認できることから、「熊野神社」に由来する地名なのかもしれないと思って、地域調べを深めていきます。ちなみに、現在は、図１に示された場所に熊野神社は無くなっていますので、現地のまち歩きをしても「熊ノ前」と「熊野神社」との関係を直接結び付けることはできない状況になっています。それだけに、古い年代の地図は様々なヒントを与えてくれます。

図１　仙台市太白区富沢字館の付近の地図

出典：富沢館遺構配置図（仙台市史特別編７　城館、平成 18 年３月、pp. 182）に加筆

3．郷土誌などで調べる

「熊ノ前」と「熊野神社」との関係性を探っていくにあたり、地図の他に郷土誌も有効な情報源となります。実際に調べてみると、表１のような記述を確認することができました。

ここで、熊野神社との関係で、「館」という地名が出てきました。「館」とは、「土塁や堀をめぐらした住居。規模の小さな城。」を意味するものであり、その居住者は、伊達家の家臣、入生田氏であることがわかりました。入生田家の在郷屋敷を中心に館という集落が形成されました。

図２の地図を通して、入生田家の屋敷のまわりに、敵の侵入を防ぐ盛り土で造った土塁や、堀のあとが確認できるように、入生田屋敷は、文字通り小さな城であって、その場所が「館」という地名になったことも大きくうなずけます。熊野神社の近くに住んでいたのは、落語でお馴染みの長屋の熊五郎さんではなかったわけです。

- 神社としては、字館の西端に熊野神社がある。（出典：仙台市史特別編７ 城館、平成18年３月、pp.183）
- 富沢字館の庄子あさのさんの宅地内にまつられてある熊野神宮もかなり古い歴史を持つ。（出典：西多賀郷土物語、関根一郎著、松木産業、昭和52年12月、pp.178）
- 熊ノ前は、熊野権現をまつった熊野宮の前（南）の地域を、昔の人々が地名として残したのではないかといわれている。（出典：西多賀探訪記（第4号）西多賀地区の字名の由来、西多賀歴史探訪会、1995年11月、pp.19）

表１　熊野神社に関する情報

図２　館と入生田家との関係
出典：富沢館遺構配置図（仙台市史特別編７　城館、平成 18 年３月、pp. 182）に加筆

4. 自然災害との関連性で考えてみる

入生田氏という家臣がこの富沢の領地を伊達政宗から与えられたのは、1592 年だったとする古文書があります。今から 400 年以上前のことです。そうすると、入生田家の先祖は、400 年以上前から、この場所に住んでいたことになりますが、生活を続ける上で、自然災害の影響は受けなかったのだろうかと疑問を抱くことになります。

そこで、「熊ノ前」をいったん置いておいて、「館」というあたりの土地の特徴をもう少し調べて行くことにします。古い年代の地図と同様に、古い年代の航空写真もまた有力な情報源となります。国土地理院の地理院地図というウェブサイトを活用して、今から 70 年ぐらい前の館のあたりの航空写真を見てみたものが図３です。

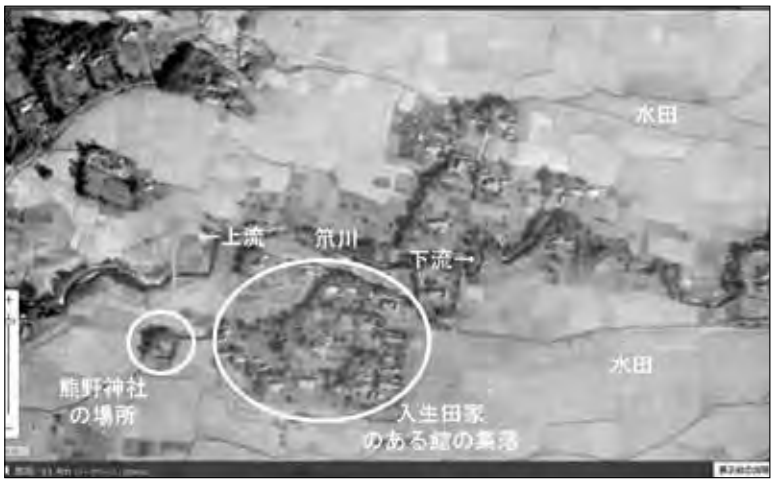

図３　仙台市太白区富沢字館の付近の航空写真（1945 ～ 1950 年頃）

左から右にうねうねと流れ

ている笊川があって、入生田家のある館の集落や熊野神社のある場所も確認することができます。そして、館の集落のまわりは、ほとんどが水田となっている様子もわかります。ここでまた疑問が湧いてきます。館の集落は、広い土地の中でどこに造ってもいいはずなのに、どうして、この場所にできたのか…。

5. 土地の高低差を確認する

川の氾濫や洪水のことを考えると、低い土地よりも高い土地の方が有利なことは容易にイメージできます。そこで、土地の高低差を調べる方法として、ここでも国土地理院のウェブサイトが活躍してくれます。実際に、館の周辺の土地の高低差を色わけして表示してみたものが図４です。

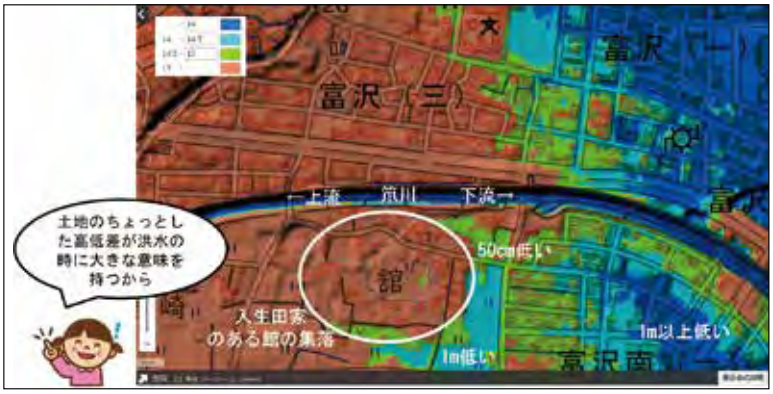

図４　地理院地図の色別標高図

「館」の集落が含まれた茶色で色分けされた場所を基準にして、周辺の土地の高低差を見てみると、黄緑色のあたりは館の場所よりも 50 cmぐらい低く、薄い水色のあたりは１ｍぐらい低く、濃い青のあたりは、１ｍ以上も低いことになります。土地のちょっとした高低差が洪水の時には大きな意味を持つことから、400 年前の入生田家の先祖は、土地の特徴をしっかり見極めて、なるべく浸水しないように、あるいは浸水による被害が小さくなるように、少しでも高さの高い場所に館の集落を造ったわけです。

6.「笊川」という川

さて、洪水の原因となる笊川ですが、郷土の資料を調べることで、表２のように「あばれ川」や「いたずら川」と呼ばれ、やはり大雨では氾濫を繰り返してきた川であることを知ることができます。

一方で、笊川の水は、農業用水や生活用水として重要な存在であり、また、川に生息する動植物は人間にとっての自然の恵みとなります。自然には恵みと災いの二面性があり、日頃は恵みを受け、災害時には最小限の被害で済むような工夫や知恵を持つことが私たちにとって重要となります。

- 太白山を源流とする笊川は、古代より曲がりくねった自然にできた小川で、上流は急流であって、水はあっという間に下流の平地部に到達する。本流の名取川が大雨で増水すると笊川の水が逆流し、下流一帯が遊水地帯になる。昔からのあばれ川、ザル川と言われていた。（出典：菅野照光：太白区の移り変り　山・川・道ものがたり、創栄出版、1995 年、pp.28を一部改変）
- 私たちが若い頃の笊川は、“いたずら川”と言われ、ちょっとたくさん雨が降れば、たちまち川が氾濫してまわりの田畑を水浸しにした。せっかくそれまで育ててきた稲や野菜をだめにしてしまい、反対に４～５日も日照りが続けば川に水がなくなり、田んぼに引く水がなくなって、田植えや稲の成長をさまたげた。本当に気ままな川で苦しめられた。庄子庄太郎さん（泉崎）のはなし～笊川の思い出～より（出典：西多賀歴史探訪会：西多賀探訪記、第８号　笊川編、1999年、pp.5-6）

表２　笊川に関する情報

7. 失われていく先人からのヒント

最近の館のあたりを Google map で見てみましょう（図５）。70 年前の航空写真で確認したうねうねと流れていた笊川は、まっすぐな川になって、堤防も整備されたことがわかります。入生田家は今でも末裔の方が館の場所に住んでいますが、前に述べたように「熊野神社」は今ではなくなっ

てしまいました。

そして、70年前は低い土地で水田となっていた場所は、地下鉄の駅や大型ショッピングセンターなどがある住宅地となり、多くの人が生活するまちに変わりました。笊川の氾濫は、決して起きて欲しくはありませんが、堤防が整備されたので、大雨の時の避難のことや災害の備えをもう考えなくてもよくなったのでしょうか…

図５　仙台市太白区富沢字館の付近（Google MAP に加筆）

８．最近の笊川

写真１は、令和元年東日本台風（台風19号）の時の笊川のようすです。この台風による仙台市内の累積雨量は380㎜程度で済んだことから、堤防の破堤や越水とはなりませんでしたが、結構な高さまで水かさが増えて、危険な状況だったことがわかります。左側の写真がふだんの笊川なので、川の表情は急に変わることを再認識することができます。

写真１　笊川（左：ふだんの穏やかな笊川、右：台風が過ぎ去った後の笊川

堤防も放水路も整備されたとは言っても、大雨の時の避難のことや災害の備えを考え、行動していくことが現代を生きる私たちにも必要になることを教えてくれています。

９．まとめ

災害の備えのためにも、いろんなヒントを与えてくれる「地名」ですが、表３のように、現代的な簡単な名称にどんどん変わっていきます。ここでも取り上げてきた､「館」や「熊ノ前」の地名も、令和３年６月から、富沢西一丁目～五丁目というように、残念ながら変わってしまった。

地名には、その地に起きた災害の歴史や特徴を、現在に伝えるメッセージが隠されていることがあります。それは、災害の備えにあたって、とても重要なヒントになる場合があります。何気ない地名の由来を探ることから始めた学びのプロセスを通して、郷土の自然と歴史を理解し、次の災害に備える防災教育の実践のアイディアを紹介しました。

変更前の町名	変更後の町名
【富沢】字鍛冶屋敷前・字川前浦・字熊ノ前・字館・字館東・字堀ノ内・字山口の各一部	富沢西一丁目
【富沢】字熊ノ前・字館・字堀ノ内・字宮崎の各一部 【富田】字京ノ北の一部	富沢西二丁目
【富沢】字鍛冶屋敷・字鍛冶屋敷前・字熊ノ前の各一部 【富田】字京ノ北・字京ノ中・字京ノ南の各一部	富沢西三丁目
【富沢】字鍛冶屋敷前・字川前・字川前浦・字熊ノ前・字寺城・字中川原・字舞台・字六本松の各一部	富沢西四丁目
【富沢】字鍛冶屋敷・字鍛冶屋敷前・字寺城・字中川原・字舞台・字六本松の各一部 【富田】字京ノ中・字京ノ南の各一部	富沢西五丁目

表３　住居表示の変更